

古民家が紡いできた歴史と文化を体感してほしい――

黒澤さんが修復し、生まれ変わった福用の古民家「野菊の宿」。黒澤さんは古民家を、昔ながらの生活体験や文化交流ができる文化拠点として、地域に開放しています。

【古民家との出会い】

静岡市の文化財などの調査員として5年間、駿府城の天守閣に関する調査を行った黒澤さん。縁あって譲り受けた古民家は、傷みの激しい状態でしたが、ひと目で歴史ある貴重な建築物であると感じました。

「出会いは約5年前。友人から、福用にとっても古い家があると紹介され、現地に赴きました。私は、貴重な歴史が詰まったその家屋にときめきました。建物に使われている柱や梁は、『当初材』という建築当初から使われていた材料。ここから、築約250年と推定でき、県内でも貴重な、かなり古い建築物であると分かりました。基礎部分も残って

いたので、なるべく当時のまま保存したいと考えました。後日、元の所有者と交渉して、家を譲り受けたのです」

【建物に息づく歴史】

古民家には、当時の暮らし



古民家「野菊の宿」管理人
黒澤 脩さん(家山)
くろさわ おさむ

敷に敷かれた珍しい琉球畳。江戸時代から現存する囲炉裏と、その煙で真っ黒になった壁や天井。通常1本しかない大黒柱が2本。これらは貴重な歴史財産です。修復には、16人以上の地元有志が協力し

や文化に関する歴史的特徴があると、黒澤さんは話します。「至るところがボロボロでしたが、いくつもの特徴を確認できました。三和土と呼ばれる素材で作られた土間。わらなどを叩くための搗石。座

てくれました。草取りから瓦の撤去まで、みんなで約2年間、手分けして作業し、今年の2月20日に『野菊の宿』が完成しました。まず、地元の皆さんに見てもらいたくて、一軒一軒あいさつしました」

【「グローカル」を体現する場所】

黒澤さんは、古民家がグローカルを体現できる場所として、施設を開放しています。

「グローカルとは『グローバル』と『ローカル』を合わせた造語で『国際的な視野で物事を考えつつ、必要に応じて地域視点で行動する』という意味です。野菊の宿は、当時の住民の生活と文化を感じることができるところ。そういうところでみんなが、食事や音楽などを楽しみ、それぞれの知恵とスキルを共有し合えたら、素敵だと思いませんか。地域の魅力を再発見し、古里を誇りに思うことは、生きる上でとても大切なことだと思います。こうしたグローカルな取り組みが、さまざまな視点で物事を考える力と地域への関心を育ててくれると、私は信じています」

250年もの歳月を経て、生まれ変わった野菊の宿。黒澤さんは「ぜひ、ここで食事や音楽を楽しんでほしい」と笑います。その言葉からは、人々が集い活発に交流できるような古民家にしたいという、思いが伝わってきました。



江戸時代から現存する大黒柱が立つ「野菊の宿」

Shimadajin File #103

島田
Story 人